

「分かりあうことの大切さ」

新郷村立新郷中学校

三年

戸田

穂奈美

障害のある人が車いすでの乗車を拒否されたり、アパートの入居を断られる事案が発生している。車いすを使わなければ歩くことができない人はたくさんいる。私達がバスや電車を使いたく乗車を断られたら、どのような気持ちになるだろう。しかも、車いすでの移動は想像以上に体力がいる。それなのに、理由もなく乗車を断られたら、すごく悲しい気持ちになってしまう。アパートの入居についても同じだ。私達健全者が入居を断られることはまずないだろう。それなのに、「障害者」というだけで入居を断られてしまうのは絶対におかしい。このようなことを私達は無意識にしてしまい、障害者を差別してしまっているのではないだろうか。障害者にだって私達と同じように人権がある。だから、一人一人を平等に、そして大切にしていかなければならない。では、どのようにすれば、全ての人が安心して暮らせる社会をつくっていくことができるのだろうか。

確かに健全者である私達は、「障害者」という言葉を使い、偏見を持ってしまいがちだ。障害にはたくさん種類の種類があり、症状も人それぞれだ。見ためや話し方から障害者だと分かる人もいる。いくことができるのだろうか。

人は第一印象で相手を決めるといいますが、その第一印象から偏見を持ち差別してしまう。しかし、障害は「害」ではなく「個性」なのだ。ただ少しだけ健全者ができることができなだけなのだ。私達健全者であっても、できることとできないことがある。だから、健康者と障害者の間に違いはなく、違いを生んでいるのは、心の中の「偏見」以外の何者でもない。

そう考えたのは、小学校の時ある先生から聞いた話からだ。その先生は、「障害者の人は、あなた達よりも苦手なことが少し多いだけなんだよ。」

とおっしゃっていた。私は泳ぐことが苦手である。だから、先生の助けやビート板等を使うのだ。それはごく普通のことである。例えば目の見えない人は「見る」ことが「苦手」なのだ。だから盲導犬の助けやつえを使う。さらに、点字ブロックや音の出る信号機などもある。耳の聴こえない人は「聴く」ことが「苦手」で、補聴器などを使う。だれにだって「苦手」なことはある。だから誰かの助けや補助してくれるものを使うのだ。それは私達健全者も同じである。私達は「障害」に対して、おそろくあまりいいイメージを持ってはいないだろう。だからこれからは、「障害」に対して「苦手なこと」というイメージを持っていけばいいのだ。そうすれば、障害者に対する偏見はなくなっていくのではないだろうか。人それぞれ苦手なことは違う。それは障害者の人達も同じだ。だから、さまざまな助けがある。それは、私個人ができるものとできない

ものがある。

では私ができることはなんだろうか。道で困っていたら助けるや、バスや電車で席をゆずるなど、小さなことかもしれない。でもその小さなことが積み重なっていくと、大きなものになり、障害者の人達の心に届くかもしれない。また、施設や道路を整えて、障害者の人達にやさしい環境をつくっていくことも大切だ。これを、「バリアフリー」というが、これは物理的な障害だけでなく、心理的な障害を取り除くことも同じだ。だから、私達それぞれが意識とバリアフリーの考えが共通すれば、障害者への差別や偏見がなくなっていくのではないだろうか。そして少しずつ全ての人が安心して暮らせる社会ができていくのではないだろうか。

私達には一人一人に人権があり、それを大切にしていくことが大切である。私達健常者と、障害者が助け合い、分かちあっている。いくことができれば、人権を大切にすることにもつながっていくのではないか、と私は考える。そして、この考えが広まれば、真の意味で、ノーマライゼーション社会へ近づく大きな一歩となるだろう。